

壁

に掛けたカレンダーも半分になった。押さえつけられたような日々は、カレンダーにもおもりが付いているかのように見えたが、いくら慣れ親しんだ日常に戻つてみると、日の経つスピードも元通りになった。もつともここへ来て、雲行きが怪しくなつてきてはいるが。

退職の年つてどんな気分なのだろうか、と一年一年近づくと気になつて来た。それを聞くのに遠慮もなくなつたところからは先輩たちに気楽に聞いていたが、誰からも特別な感慨は聞かれなかった。我が身がいよいよそうなつてみると、なるほど自分の中を覗いてみてもたいしたものとは転がっていない。

今年のカレンダーは、モネを飾っている。それまでずっと貰うものだったのだが、毎日目にするものだから誰かの作品をじっくり時間をかけて鑑賞するのもおもしろそうだと思う、ここ何年かは購入するようにしている。

絵画カレンダーなど山のようにありそうだが、紙質や印刷がよくて版の大きなものとなるとそれほど数はなく、モネを選んだのは、単なる消去法の結果である。知らぬ人のない巨匠で、これまで何度も教科書や本で見、実物も美術館で見ているはずではある。でも、これが超有名な画家の手になる名画、とまずは意

味づけして見ているだけで、どれほど心に向けていたかは怪しい限りだ。

モネの絵は、どれも輪郭がはっきりしない。赤や白の花をどつきりつけた植え込みの前で縫い物をしている妻を描いた一枚、代名詞のような睡蓮、映画のワンシーンみたたく複数の人物が交錯する作品、どの絵も、花や葉、服、顔、手、光の中で混ざり合うように描かれている。

毎日見ているうちに、モネのものの見方とぼくのそれとは違うのだということだけはわかつてきた。くつきりと物と物とが、物と者さえも、分かれているのではなくて混ざり合ったり融け合ったり、浮かんだり消えたり。睡蓮の葉は、光でもあるし、水でもある。花にもなり魚にもなる。輪郭を描く線は、ものを結びつけているようでもあり、もともと隔てられていないところをただ通り過ぎていく時の航跡のようにも見える。モネが二百枚以上も睡蓮を描き続けたのは、いくら描いても足りない有り様をそこに見、知つたらなのだろう。

退職にあつたつての感慨が一つある。どうやらものを見知らなさすぎるままずっと来てしまつたらしい。まあそうであるならば、これからのもの見方を身につけるほかない。まずはモネに学んで。



専業ババ奮闘記(その2) 15

木幡智恵美

同窓会(4)

小部屋が並ぶ居酒屋で、トイレから部屋に戻ろうと廊下を歩き、白髪や禿げた頭が並ぶ部屋の前を素通りしようとしたときのこと。「さてよ、ここだ」と足を止め、頭の下を見ると、見慣れた顔が並んでいるではないか。何年か前の同窓会でのことだ。還暦を過ぎた初老の面々が松江の宴会場に入ったのは、途中遅れると電話を入れ、急ぎ足で向かったものの、予約時刻を三十分過ぎた刻限だった。

学生時代から、会話の八割方はHで、YやKが時々ちゃちゃを入れ、IがHの話を受けて返す。今回来ていないMを含め、あとはそんな会話に傾いたり、笑つたり。その構図は半世紀近く経つても変わっていない。昔話に交じつて話題に出るのは、子や孫のこと。Hは独身の一人息子のことを、面白おかしく話しながらも、言葉の端々から愛情が滲み出ている。明日の八重垣神社参拝では、どんなお願いをするのだろうか。

飲み放題の制限時間が来たので店を出、駅まで歩く。その後、六人は駅近くで二次会をし、店主からのどぐろをサービスしてもらつたらしい。

翌日は神社巡り。熊野神社へ詣で、八重垣神社に行く途中、風土記の丘に寄る。「私ね、高校の時、考古学に興味があつてね、そつちの道も考えたことがあるんよ」。数学科に入って教師となり、途中から臨床心理士の資格を得て今でもカウンセラーを続けるが言う。男連中も展示品や説明書に見入つている。ここに寄つて正解だった。

八重垣神社は、以前来たときとは比べ物にならないほど参拝客が多かつた。このところ、出雲地方が脚光を浴びているのは間違いない。Hだけでなく、まだ結婚していない娘や息子を持つ者がほかにいる。私には二人も。まあ、親がどう言おうが、本人の気持ちだから、無病息災だけお願ひした。

帰つて玄関を開けると、サザエご飯のいい香りが漂つてきた。

30代フリーター やあ、ジイさん。東京の新型コロナウィルスの新規感染者が16日に286人と過去最多を更新した。

年金生活者 ウイルスの性質が少しずつわかり、未知ゆえの恐怖が薄らぐにつれ、マスメディアは「もつと恐れなくはダメだ」といわんばかりの報道を続けている。

30代 怖いことは確かだ。

年金 流行の初めのころ、国民ひとりひとりが持った個人的な感情としての恐怖は、もうひとつの恐怖、共同的な恐怖と呼ぶべき恐怖を派生させた。

「正しく恐れる」という啓蒙的な言葉はそれを象徴している。恐怖は個人的な感情であり、その大小も有りようも人によって異なるはずなのに、恐れ方に共通の枠をはめようとするのがこの言葉だ。

吉本隆明は『共同幻想論』の中の「禁制論」で「恐怖の共同性」ということを言っている。柳田国男の『遠野物語』に描かれた山人に対する恐怖の

体験のエピソードは、うわさ話やまた聞きによって虚構性を増し、それによって恐怖が「〈共同性〉の度合を獲得してゆく」と。

新型コロナをめぐってはネット上にならざるやまた聞きの情報が大量に流れ、虚構（デマ）が拡散することによって恐怖が共同化していった。そればかりではない。何もしなければ全国で42万人がコロナ感染で死ぬという「8割おじさん」のシミュレーションも恐怖の共同性の形成にあずかった虚構のひとつと考えることができる。それは計算上は成り立つけれど、前提にした数値（再生産数）が日本の実態とかけ離れたものだった。

30代 素人が専門家の難しい計算にいちやもんをつけて大丈夫かよ。

年金 医療界や行政は恐怖の共同性を梃子にして個人をコントロールし、コロナ対策を進めてきた。

個人の感情としての恐怖はさつき言ったとおり人によって大きさも態様も違う。当然ひとりひとりのコロナへの

の対処の仕方も異なってくる。ウイルスはそうした個々人による防御を突破して広がるから、社会全体としての対処が必要となる。その主要な手段が隔離や行動制限だ。

それに応じるかどうか、応じるとしてもどの程度かは、個人の恐怖の度合いや有りように左右される。それをそのままにしておくとは社会全体としての対処が困難になる。そこで利用されるのが共同的な恐怖だ。それは大きさや態様が一律化された恐怖であり、これを利用すれば対策の一律化が可能になる。

フーコーは、近代以前の権力が、逆らう者を殺す権力だったのに対し、近代の権力は生かして従わせる権力になったとして、これを生権力と名づけた。生権力は一方で、個人の身体を訓練して規律に従わせる。その場所が軍隊や学校、工場だ。他方で、個人でなく住民全体の健康状態や人口動態を統計・調査などを通じてコントロールする。

コロナ対策に臨んだ医療界や行政もそうした近代的な生権力として、個人の行動を制限し、感染者の数をコントロールしようとした。だが、そのために利用したコロナへの共同的な恐怖は、『共同幻想論』に従えば近代的なものではない。

30代 枝野幸男が「東京を中心に緊急事態宣言を出すべき客観的な状況だ」と記者団に語ったと報じられていた。

年金 都内の新型コロナの新規感染者数が緊急事態宣言中のピーク時を上回っている、そう言ったのだろう。だが、現在の重症者は1けた台で、100人超だった最多時にくらべるとはるかに少なく、医療も逼迫していない。それなのに、枝野が緊急事態宣言を言い出したのは、安倍政権には危機感が足りない印象づけたからだと推察される。

政権を批判するには、楽観論を唱えても効果がない。悲観的な見通しを強調し、政権はそれに手をこまねいていると批判する必要がある。人は安倍よ

りも恐怖を誘う情報に説得されやすい。安堵していいなら、対処の必要はないと考えるが、恐ろしいことが起きるかもしれないと言われると、何とかしなければと不安に駆られる。

30代 災害や事故などで危険が迫っても「大丈夫だろう」と楽観視してしまう「正常性バイアス」にそれは反するんじゃないか。

年金 「大丈夫」にしがみつこうとするのは、そのときまで「正常」という

共通の了解によって形成されていた共同性から逸脱することへの恐れがあるからだ。

政治家はそうした恐怖の威力を利用する。危機感をあおることでも自らのへの国民の支持を取りつけようとする。安倍政権が全国一斉の休校を要請したり、人どうしの接触の8割削減を呼びかけたりしたのは、コロナ対策だけでなく、自らの求心力を高めようとする意図があったからと推察できる。

だが、それによる経済への打撃で国民の不満が蓄積され、逆に求心力が低下してきたため、今は悲観論から楽観論への切り替えをはかっている。

いま人びとの恐怖の対象はコロナにとどまらず、自粛にともなう生活の危機におよんでいる。それも共同的な恐怖を形成し、コロナ同様そこからの逸脱への恐怖を生み出した。緊急事態宣言を主張する枝野がコロナへの共同の恐怖に依拠し、その必要はないという政府が生活の危機への共同の恐怖に依拠している構図が見える。

ニュース日記 747
中村 礼治

コロナ恐怖